

平成9年度

地域畜産状況レポートNo.1

社団法人 熊本県畜産会

# 大規模草地による近代的大型酪農

農事組合法人山鹿酪農組合  
組合長 井 正吾

ヒゴタイの里としても知られる阿蘇郡産山村は、熊本県の最北東部、阿蘇外輪山と久住山の間に位置し、人口1,800人の豊かな清流と緑に囲まれた山村です。村あげて、観光牧場の「うぶやま牧場」づくりに取り組んでおり、そのキーステーションとなるのが標高約750mの台地にある農事組合法人山鹿酪農組合です。

## 山鹿酪農組合の生い立ち

農事組合法人山鹿酪農組合の誕生は昭和40年で、ちょうどその頃阿蘇外輪山北側の広大な自然牧野のあちこちで、「北外輪地域国営大規模草地改良事業」が開始されました。この当時作られた入会牧野草地開発団地は12ヶ所あり、そのすべてが酪農団地でありましたが、今日成っているのは山鹿酪農と狩尾酪農組合のみです。

産山村山鹿地区には約220haの入会地があり、昭和40年当時、60名の住民の共有地となっていました。当時、ほとんどの住民は農民、1戸当り1ha弱の田畑耕作と、数頭の褐毛和牛を放牧して生活していました。

共有入会地に国営草地改良事業の話が持ち込まれたとき、山鹿地区の住民たちの意見は賛否両論に分かれたという。賛成派は共同酪農の展開による利益配当と雇用機会増とに期待したのです。賛成派が大勢を占め、昭和40年3月に入会地地権者60名全員を組合員とする農事組合法人山鹿酪農組合が設立されました。

## 山鹿酪農組合の概要

設立から30年余り経った現在の山鹿酪農組合

- 組合長 井 正吾
  - 草地面積 約70 ha、(他の野草地 20 ha)
  - 飼養頭数 208 頭 (経産牛 150 頭)
  - 経産牛1頭当り 乳量 7,200 kg
  - 総産乳量 980トン (平成7年度)
  - 酪農粗収入 約1億2千万円
  - 従業員数 井組合長外4名
- 近代的大型牧場へと発展しています。



山鹿酪農組合スタッフ (中央が組合長)

平成5～6年度地域畜産活性化総合対策事業 (約3億6千万円の総事業費) を利用した施設整備

- (1) 150頭フリーストール牛舎、育成舎
  - (2) ヘリンボーン型8頭ダブル、パーラー
  - (3) 糞尿処理施設～ばっ気槽 (308 $\text{m}^3$ )  
" 貯留槽 (926 $\text{m}^3$ )
  - (4) 大トラクターと草地管理一貫体型の作業機の導入。(大型ロールベアラ等)
- ※環境保全型酪農経営モデルになっています。



パーラー内 (ヘリンボーン型)

## 山鹿酪農のあゆみ

昭和40年の発足当時、牧場の基本方針は無畜舎、放牧主体の飼養管理方式でした。そのため低乳量であっても低コストであればよいと考え、パーラーと避難牛舎のみとしました。

また牧場従業員は飼養管理に専念させ、採草や草地管理作業は全組合員の出役で実施しました。

昭和57年から乳成分規制が強まり、放牧方式では最低脂肪率3.15%のクリアが困難になったため、舎飼方式とし、フリーストール式のバラック牛舎を建設しました。

平成3～4年頃畜産経営の環境問題が騒がれ始めた頃から舎飼養形態に変わり、有効処理施設のない当牧場では降雨の度に糞尿が流出し、水道の水源、河川等の汚染につながりました。

周囲のゴルフ場や観光施設、グラウンドを訪れた人から不評があり、また住民からも改善の要求がだされたので、組合全員の連帯保証で、国、県、村の助成を受け、現在の近代型牧場が建設されました。



糞尿処理システム

## 乳牛の飼養管理

井場長を中心に乳牛の健康状態、発情の早期発見等の観察をしながら、1日の作業は、搾乳朝、夕の2回（1人）、飼料給与2回（1人）、敷料の交換や牛床の掃除は2人で搾乳時間中に実施しています。休みは交代制です。

乳脂肪率3.8、無脂固型8.8、また細菌数も少なく、良質牛乳が生産されています。乳量及び乳質改善のため、飼料計算による飼料給与を実施されています。

乳牛改良では優良牛の選定による後継牛の育成、一部優良牛を導入しています。

一昨年受胎率の低下と事故牛の多発から初妊牛（北海道）を導入しました。

一方黒毛和種の種雄牛を導入し、初産牛や低能牛には自然交配し、受胎率の向上とF1生産による子牛価格上昇につとめています。

糞尿処理施設の対応にはスラリーストアの利用による草地還元を行って、公害防止につとめています。

## 牧草地の管理

牧草地70haの栽培管理並びに刈り取り作業は大型トラクターによる一貫作業体系で実施されています。

牧草地への施肥は3月、6月、8月に尿散布、11月～12月に元肥として草地化成を施肥し、牧草の増収につとめています。

牧草刈り取りは、第1回刈り5月下旬、第2回8月上旬、第3回は10～11月に行い、総て予乾後に大型ロールペラー機にてロールしています。年間約2,000梱包して自給粗飼料の確保による年間平こう給与されています。

ロールペラー機の導入により、省力的に作業ができるようになり従来は全会員作業で行っていた乾草作りが、現在では牧場職員が主体になっています。

ダイオー等の雑草駆除や低草地の更新等による牧草の増収につとめています。

## 観光施設「うぶやま牧場」

平成8年4月完成の第三セクター方式観光牧場「うぶやま牧場」では山鹿酪農組合で生産される牛乳が、アイスクリーム、ヨーグルト、バター等の乳製品加工して、交流館で販売され、良く売れ、観光客に喜ばれています。



イベントアウトドアイン産山



乳製品加工館

平成9年3月22日には、うぶやま牧場のイベントが開催され、焼肉や、自衛隊による音楽会、搾乳の現地体験、野焼き体験等の種々の行事が行われて、多くの参加者がありました。

## 今後の山鹿酪農の発展

近代型大型酪農経営の安定を図るため、搾乳牛150頭に増頭するに伴い、乳牛の改良、乳質の改善、優良牛の計画育成、子牛の販売と自給牧草の増収による飼料自給率向上を図り、低コスト酪農経営の安定を計ります。

さらに観光牧場は、山鹿酪農組合員の雇用促進と地域の活性化に大きく貢献すると期待されています。

レポーター

熊本県畜産会相談窓口員 森 敏 信